



4/17

4/18

4/22

4/23

# Alan GILBERT

Conductor

指揮 アラン・ギルバート

ニューヨーク・フィル音楽監督、ジュリアード音楽院指揮・オーケストラ科ディレクター。これまでにロイヤル・ストックホルム・フィル首席指揮者（現・桂冠指揮者）、NDRエルプフィル（北ドイツ放送響）首席客演指揮者を歴任。ベルリン・フィル、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、クリーヴランド管、フィラデルフィア管、ボストン響、サンタ・チェチーリア国立アカデミー管などへ定期的に客演。オペラではメトロポリタン歌劇場、チューリヒ歌劇場、スウェーデン王立歌劇場などへ登場した。

Alan Gilbert is Music Director of New York Philharmonic, and Director of Conducting and Orchestral Studies, the Juilliard School. He was formerly Principal Conductor of Royal Stockholm Philharmonic and Principal Guest Conductor of NDR Elbphilharmonie Orchester. Gilbert makes regular guest appearances with orchestras including Berliner Philharmoniker, Gewandhausorchester Leipzig, Cleveland Orchestra, Philadelphia Orchestra, Boston Symphony, and L'Orchestra dell'Accademia Nazionale di Santa Cecilia. He has appeared at Metropolitan Opera, Oper Zürich, and Royal Swedish Opera, among others.

A  
Series

## 第828回 定期演奏会Aシリーズ

Subscription Concert No.828 A Series

東京文化会館

2017年4月17日(月) 19:00開演

Mon. 17 April 2017, 19:00 at Tokyo Bunka Kaikan

B  
Series

## 第829回 定期演奏会Bシリーズ

Subscription Concert No.829 B Series

東京オペラシティ コンサートホール

2017年4月18日(火) 19:00開演

Tue. 18 April 2017, 19:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor

ヴァイオリン ● リーラ・ジョセフオウィッツ Leila JOSEFOWICZ, Violin

コンサートマスター ● 四方恭子 SHIKATA Kyoko, Concertmaster

## ラヴェル：バレエ音楽《マ・メール・ロフ》 (30分)

Ravel: "Ma Mère l'Oye", Ballet

「前奏曲」～第1場「紡ぎ車の踊りと情景」～第2場「眠りの森の美女のパヴァーヌ」～  
 第3場「美女と野獣の対話」～第4場「おやゆび小僧」～第5場「パゴダの女王レドロネット」～  
 終曲「妖精の園」

休憩 / Intermission (20分)

## ジョン・アダムズ：

## シェヘラザード.2 — ヴァイオリンと管弦楽のための劇的交響曲

(2014) (日本初演) [ジョン・アダムズ70歳記念] (50分)

John Adams: Scheherazade.2 — Dramatic Symphony for Violin and Orchestra (2014) (Japan Premiere)

I Tale of the Wise Young Woman

- Pursuit by the True Believers

II A Long Desire (love scene)

III Scheherazade and the Men with Beards

IV Escape, Flight, Sanctuary

若く聡明な女性の物語

ー狂信者たちに追われて

はるかなる欲望 (愛の場面)

シェヘラザードと髭を蓄えた男たち

脱出、飛翔、聖域 (サンクチュアリ)

(ツィンパロン／生頼まゆみ ORAI Mayumi, Cimbalom)

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会

シリーズ支援：● 明治安田生命 (Bシリーズ)



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。  
 写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。

Violin

# Leila JOSEFOWICZ

ヴァイオリン

リーラ・ジョセフォウィッツ

©Chris Lee



ヴァイオリンのための現代作品の熱心な支持者。ジョン・アダムズ、エサ＝ペッカ・サロネン、コリン・マッシューズ、スティーヴン・マッキーらが彼女のために作品を書いている。サロネンのヴァイオリン協奏曲の録音は2014年グラミー賞にノミネートされ、2015年にアダムズの《シェヘラザード.2》をアラン・ギルバート指揮ニューヨーク・フィルと初演。近年はベルリン・フィル、チューリヒ・トーンハレ管、ロンドン響、シカゴ響などと共演している。

Leila Josefowicz is a passionate advocate of contemporary music for the violin. Composers such as John Adams, Esa-Pekka Salonen, Colin Matthews and Steven Mackey have written violin works especially for Josefowicz. In 2015, she premiered John Adams' *Scheherazade.2* with New York Philharmonic conducted by Alan Gilbert. Recently, she has performed with orchestras including Berliner Philharmoniker, Tonhalle Orchester Zürich, London Symphony Orchestra, and Chicago Symphony Orchestra.

## ラヴェル： バレエ音楽《マ・メール・ロワ》

モーリス・ラヴェル (1875~1937) にとって、1912年はバレエの年だった。第1作が1月28日にテアトル・デ・ザールで上演された《マ・メール・ロワ》、第2作が4月22日にシャトレ座でラヴェル自身が指揮をした《アデライド、または花言葉》(《高雅で感傷的なワルツ》管弦楽版)、そして最後が6月8日にロシア・バレエ団が委嘱初演した《ダフニスとクロエ》である。前2作は《ダフニス》と異なり、ラヴェル自身がストーリーを考え、以前のピアノ曲を管弦楽版に編曲して用いている。

面白いのはロシア・バレエ団に対するラヴェルのアンビバレントな感情だ。ベンジャミン・イヴリーは、1916年にセルゲイ・ディアギレフ (ロシア・バレエ団の創設者／1872~1929) が《マ・メール・ロワ》の上演に意欲を示した時のラヴェルの反応を伝えている。「『マ・メール・ロワ』をロシア・バレエ団がですって! (中略) 彼らに攻撃された作品は異常に輝きますが、その輝きは砲火の輝きです……このささやかな幻想は、アジア的豪奢のなかで燃えさかるというよりも、むしろより尊敬される、息の長い、もっと地味な運命をたどるべきなのです」(ベンジャミン・イヴリー著、石原俊訳『モーリス・ラヴェル ある生涯』アルファベータ、2002年)。ラヴェルは確かにスラヴ的な熱狂をも含む壮大な《ダフニス》で成功をおさめたが、これと対極的な《マ・メール・ロワ》のメルヘン的世界観も大切にしていたことがわかる。

原曲は友人のこどもたちのために作曲したピアノの連弾曲である。ロシア・バレエ団のセンセーショナルな成功を快く思っていなかったテアトル・デ・ザールの支配人、ジャック・ルーシェ (1862~1957) は、フランスらしいバレエ音楽を求めて、ラヴェルにこの連弾作品の編曲を依頼した。ラヴェルは全体を一つの物語とする台本を書き、原曲の管弦楽版を作ると同時に、2曲新たに作曲して順序を変更。各シーンをつなぐ間奏も加えた。

ストーリーは以下のとおり。妖精の園で遊んでいたフロリーヌ王女が老女の紡ぎ車で指を突き、深い眠りにおちる。じつは老女は美しい妖精ベニーニュで、眠っている王女のために、彼女が2人の黒人のこどもに3つのおとぎ話——「美女と野獣の対話」(ボーモン夫人の童話)、「おやゆび小僧」(「一寸法師」のタイトル訳でも知られるシャルル・ペローの童話)、「パゴダの女王レドロネット」(ドノワ夫人の童話)——を語らせると、その情景が王女の夢に現れる。最後はキューピッドに連れられて王子が登場し、王女が目覚めて結ばれる。

やわらかな和音で始まる「前奏曲」はハーブとチェレスタのきらびやかな響きによって、幻想の世界へと誘う。3つのおとぎ話の主題が断片的に現れたのち、鳥のさえずりをそのまま書きとったようなメシアン風の楽想が響いて幕開けとなる（以下、全曲は続けて演奏される）。

第1場「紡ぎ車の踊りと情景」は、くるくると旋回する動きを表す目まぐるしい音型にのせて、高音域で楽しそうな舞踊主題が奏でられる。半音階的な楽想の挿入でドラマティックに変容し、弦楽器のピチカートとハーブのグリッサンドを合図に、王女は眠りにつく。

第2場「眠りの森の美女のパヴァーヌ」は眠る王女を囲んで踊られる古い舞曲。ゆったりとした4拍子で、イ調の自然短音階で書かれたフルートのメロディがクラリネット、第1ヴァイオリンへと受け継がれる。その古風な響きを半音階が支える。冒頭のフルートとホルンにヴィオラのピチカートを加えた効果を、ラヴェルは“聴衆を惑わす”オーケストレーションと自負していた。

第3場「美女と野獣の対話」では、クラリネットが優雅な美女の主題、コントラファゴットが野獣の主題を奏でる。主部は遅いテンポのワルツ。全休止の部分で王女が野獣の愛に応えると、ハーブのグリッサンドで魔法がとけて、独奏ヴァイオリンが野獣の主題を弾き、美しい王子の姿にもどる。

第4場「おやゆび小僧」は、森で道標のために撒いたパン屑を鳥がみんな食べてしまったという話。変拍子が用いられ、弱音器付きのヴァイオリンの上でオーボエ、イングリッシュホルン、クラリネットなどの管楽器が歌う。途中で鳥のさえずりがきこえて、森の情景を喚起する。

ハーブやチェレスタ、フルートが印象的な間奏を挟んで、5音音階の異国的な響きが特徴の第5場「パゴダの女王レドロネット」。女王がお風呂に入ると、人形がくるみやアーモンドで作った楽器を弾いて歌いはじめる。

ファンファーレと鳥のさえずりのあと、終曲「妖精の園」となり、パヴァーヌのモチーフを使ったヴァイオリンとヴィオラの独奏で王女が眠りから覚め、ほのぼのとした温かい楽想に包まれる。

（白石美雪）

作曲年代：4手ピアノ版／1908～10年 バレエ版／1911～12年

初 演：バレエ版／1912年1月28日 パリ ガブリエル・グロヴレス指揮

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2（第2はイングリッシュホルン持替）、クラリネット2、ファゴット2（第2はコントラファゴット持替）、ホルン2、ティンパニ、大太鼓、シンバル、トライアングル、小太鼓、シロフォン、タムタム、ハーブ、チェレスタ、ジュドウタンブル、弦楽5部

## ジョン・アダムズ:

### シェヘラザード.2 — ヴァイオリンと管弦楽のための劇的交響曲 (2014) (日本初演) [ジョン・アダムズ70歳記念]

シェヘラザードはご存知のとおり、『アラビアン・ナイト』に登場する、若く賢い娘である。妻の浮気を知って女性不信に陥り、処女と一夜を共にしては殺していたシャフリヤール王を、大臣の娘シェヘラザードは毎夜、面白い物語で楽しませる。続きを聞きたいばかりに王は彼女を殺さず、ついに千一夜が過ぎて王妃に迎えられという物語だ。これを描いた音楽としてはリムスキー＝コルサコフの交響組曲が有名だが、ラヴェルも歌曲集と序曲を書いている。いずれもシェヘラザードの語る幻想物語や冒険譚などに触発された色彩的な音絵巻を展開する。

しかし、アメリカの作曲家ジョン・アダムズ(1947~)が着目したのは、「杵物語」に登場するシェヘラザードそのものである。シェヘラザードは蜜行が行われる混乱した世界へやってきて、失われていた秩序を回復する役割を担っているが、文学的キャラクターとしては個性に乏しいので、文化的背景によってその女性像は変化する。

2013年にパリのアラブ世界研究所で開かれた千一夜物語の展覧会から触発されたアダムズは、シェヘラザードにアラブの男性中心社会で虐げられ、死と隣り合わせで語る女性を見だし、同時に蜜行の犠牲となった女性たち、たとえばカイロでのデモのさなか、エジプト軍に打ちのめされた「ブルー・ブラの女性」、あるいはテヘランで大統領選挙不正の抗議デモでホメイニの民兵組織に射殺されたネダ・アガ＝ソルタンなど、現代の「シェヘラザード」たちを重ねた。賢明に生きたシェヘラザードを描くことで、男性の抑圧のもとに置かれ、自由が保障されていない女性たちを解放したいという想いが込められている。

劇的交響曲と名づけられた通り、通常のヴァイオリン協奏曲より規模の大きい4楽章構成で、独奏ヴァイオリンをシェヘラザードとするドラマが繰り広げられる。特定のストーリーをなぞる音楽ではないが、各楽章はタイトルに示されたイメージを喚起する。

第1楽章「若く聡明な女性の物語—狂信者たちに追われて」は、ツインバロンの音色が異国的な世界へといざなう導入部に続いて、独奏ヴァイオリンがオクターヴの跳躍音型を駆使した優美な楽想でシェヘラザードの美しさを描く。独奏はリズムミックな動きへと発展し、木管楽器と呼応する動きはシェヘラザードの知性を、不協和

音の連続や猛烈な走句は人間的な強さを感じさせる。テンポが遅くなり、弦合奏のユニゾンの上で独奏が動きのある楽想を奏でたのち、ツインバロン、ハープ、チェレスタの短いモチーフを挟んで、「狂信者たちに追われて」（以下、本文中の「」は楽章の途中でスコアに記された言葉）の部分となる。息せき切って駆け抜けるようなパッセージが続き、冒頭と同じように優美な楽想を挟みつつ、追跡の音楽が勢いを増す。

第2楽章「はるかなる欲望（愛の場面）」はタムタムや大太鼓の騒然としたトレモロにのせて、バスクラリネットとファゴットとヴィオラによる主題がゆったりと奏でられ、激しい愛を表象する。ヴィブラフォンとツインバロンが加わる部分から神秘的な雰囲気が漂い、独奏ヴァイオリンが艶やかに奏でられ、ツインバロンとチェレスタ、ハープの上行音型を伴いながら、切迫した楽想となる。高揚の頂点で突然、静謐な楽想へと転じ、夢想的なオーケストラにのせて独奏ヴァイオリンがしなやかな動きをみせる。

第3楽章「シェヘラザードと髭を蓄えた男たち」は宗教裁判のシーン。冒頭は弦合奏を主体とする鋭角なパッセージとシロフォンを含むパッセージが交互に現れた後、独奏ヴァイオリンが聡明さをたたえた楽想を奏でる。ファゴットで始まるモチーフが対位法的に追いかける「教義の議論：髭を蓄えた男たちがみんなで議論する」に続いて、トランペットで始まる「判決」が威圧的に奏でられた後、独奏が激しく抗議する「シェヘラザードの訴え」、そして突如、破壊的な「有罪判決」となり、オーケストラが死刑を宣告する。最後に一節、うめくような独奏ヴァイオリンが入る。

第4楽章「脱出、飛翔、<sup>サンクチュアリ</sup>聖域」は弦合奏がうごめく暗い楽想で始まる。下行音型を繰り返しながら、シェヘラザードが束縛するものを断ち切って脱出すると、今度は激しく上行するパッセージで果敢に飛翔する。「聖域」では独奏ヴァイオリンのメロディがしなやかさを取り戻し、聖なる高みへとのぼる。清らかな音調となり、抑圧された女性たちの夢みる解放を暗示して終わる。

（白石美雪）

作曲年代：2014年

初 演：世界初演／2015年3月26日 ニューヨーク リーラ・ジョセフォウイツ（vn）  
アラン・ギルバート指揮 ニューヨーク・フィル

日本初演／2017年4月17・18日 東京 リーラ・ジョセフォウイツ（vn）  
アラン・ギルバート指揮 東京都交響楽団（本公演）

楽器編成：フルート3（第2・第3はピッコロ持替）、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、サスペンデッドシンバル、タムタム、大太鼓、ヴィブラフォン、ゴング、鞭、シロフォン、ハープ2、チェレスタ、ツインバロン、弦楽5部、独奏ヴァイオリン

C

Series

## 第830回 定期演奏会Cシリーズ

Subscription Concert No.830 C Series

東京芸術劇場コンサートホール

2017年4月22日(土) 14:00開演

Sat. 22 April 2017, 14:00 at Tokyo Metropolitan Theatre

第55回大阪国際フェスティバル2017提携公演

T

TMSO

## 東京都交響楽団 大阪特別公演

TMSO Special Concert in Osaka

フェスティバルホール

2017年4月23日(日) 14:00開演

Sun. 23 April 2017, 14:00 at Festival Hall

指揮 ● アラン・ギルバート Alan GILBERT, Conductor

ピアノ ● イノン・バルナタン Inon BARNATAN, Piano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

## ベートーヴェン：劇付随音楽《エグモント》序曲 op.84 (9分)

Beethoven: Overture to "Egmont", op.84

## ラフマニノフ：パガニーニの主題による狂詩曲 op.43 (24分)

Rachmaninov: Rhapsody on a Theme of Paganini, op.43

休憩 / Intermission (20分)

## ベートーヴェン：交響曲第3番 変ホ長調 op.55《英雄》(50分)

Beethoven: Symphony No.3 in E-flat major, op.55, "Eroica"

- I Allegro con brio
- II Marcia funebre. Adagio assai
- III Scherzo. Allegro vivace
- IV Finale. Allegro molto

主催：公益財団法人東京都交響楽団、フェスティバルホール（23日）

共催：公益財団法人朝日新聞文化財団（23日）、大阪国際フェスティバル協会（23日）、朝日新聞社（23日）

後援：イスラエル大使館、東京都（22日）、東京都教育委員会（22日）



イスラエル大使館

演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演(22日) (青少年を年間500名ご招待) 協賛企業・団体はP.51、募集はP.54をご覧ください。YOUNG SEAT

お願い

演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。





1979年、テルアビブ（イスラエル）生まれ。3歳でピアノを始め、11歳でオーケストラ・デビュー。ニューヨーク・フィルの初代アーティスト・イン・アソシエーションに任命され、3シーズンにわたり同フィルと協奏曲や室内楽を演奏。これまでにクリーヴランド管、フィラデルフィア管、アカデミー室内管、ベルリン・ドイツ響、スイス・ロマンダ管などと共演。カーネギーホール、ウィグモアホール、コンセルトヘボウなどでリサイタルを行った。

Inon Barnatan was born in Tel Aviv in 1979. He has been appointed as the New York Philharmonic's first Artist in Association and has played multiple concertos and chamber collaborations with the orchestra. Barnatan has performed with orchestras including Cleveland Orchestra, Philadelphia Orchestra, Academy of St. Martin-in-the-Fields, Deutsche Symphonie-Orchester Berlin, and Orchestre de la Suisse Romande.

## ベートーヴェン：

## 劇付随音楽《エグモント》序曲 op.84

……舞台は16世紀のネーデルランド。現在でいえばオランダからベルギーにまたがる地域だが、当時はスペインに支配されていた。その圧政からの解放を勝ち取るべく立ち上がった領主のひとりがエグモント。スペイン王が肅清のために送り込んだアルバ公に対して彼は恭順の意を示さず、投獄され死刑の身となる。エグモントの恋人クレールヒェンの祈りも届かず、彼女は毒を飲んで自害を遂げてしまう。しかしその後、牢の中でエグモントが眠りに落ちていると、クレールヒェンの幻影が自由の女神の姿で現れ、愛する人へ祝福の言葉を与えながら、同胞の民の未来が約束されていることを彼に告げる。目覚めたエグモントは決然と絞首台へ向かうのだった……。

以上は文豪ヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ（1749～1832）が1787年に完成させた戯曲『エグモント』のあらすじ。スペイン王フェリペ2世の新教徒弾圧に抗して反逆罪に問われ、ブリュッセルのグラン・プラス（世界遺産として名高い市街地中心部の広場）で処刑された、エフモント伯ラフラー（1522～68）という実在の人物を題材とする作品である。

この戯曲のウィーン上演を企画した宮廷劇場の支配人から依頼を受け、ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）は1809年から1810年にかけて全10曲の劇音楽を書き上げた。その序曲は名作のほまれ高く、単独の楽曲として演奏される機会も多い。もっとも当時の記録からうかがう限り、ウィーンの舞台初日（1810年5月24日）までに序曲は仕上がらず、4回目の公演でようやくお披露目されたいらしい。

曲は荘重な序奏（ソステヌート・マ・ノン・トロポ）で始まり、調性はヘ短調。冒頭が全管弦楽による主音のユニゾンというのもただならぬ緊迫感を醸し出す。続いて耳にとまる3拍子のリズムはバロック時代に流行したサラバンドを思わせるが、これはもともと中南米のスペイン植民地からイベリア半島を経由して“逆輸入”の形で欧州に広まった舞曲だ。つまりはスペインの圧政と、それに抵抗する民衆の姿の象徴とみなすのも不可能ではあるまい。

ソナタ形式の主部（アレグロ）は劇のストーリーを凝縮するがごとく葛藤の念と希望の光が交錯し、上記のリズム動機も随所に顔を出す。最後はヘ長調に転じた輝かしいコーダ（アレグロ・コン・ブリオ）によってしめくくられるが、これは劇音楽の終曲として、エグモントが刑場へ赴いて幕が降りた後に演奏される「勝利のシンフォニア」と同一の音楽。

（木幡一誠）

作曲年代：1810年

初 演：1810年6月15日(?) ウィーン ブルク劇場  
おそらく作曲者自身の指揮

楽器編成：フルート2（第2はピッコロ持替）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、  
ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## ラフマニノフ： パガニーニの主題による狂詩曲 op.43

セルгей・ラフマニノフ(1873~1943)は、ピョートル・チャイコフスキー(1840~93)に連なるロシア・ロマン的な作風を求めた作曲家だった。一方で大ピアニストとしても活躍した彼は、そうした作風を名技的なヴィルトゥオーゾ性と結び付けたピアノ曲の名作を多数生み出している。

ピアノと管弦楽のための《パガニーニの主題による狂詩曲》もそうしたラフマニノフのピアノ作品の特質がはっきり現れた作品で、技巧的なピアノイズムがロシア風の叙情を湛えたロマン派的書法のうちに生かされている。作曲は1934年で、主にスイスの別荘で書き進められた。

20世紀も半ば近いこの時代は音楽様式もロマン派の時代から脱却し、様々な流れが生み出されていた。ロシア革命後はアメリカを本拠としていたラフマニノフも当然そうした新しい音楽に触れる機会は多かったはずだが、この《狂詩曲》にみられるとおり、彼はどこまでもロマン的な作風を固守した。時代の流れに抗してまで19世紀ロシアの伝統を守ろうとしたその姿勢は、時代錯誤と片付けられない決然としたものが感じられる。

ピアノの技巧性とともに管弦楽の雄弁さも生かしたこの作品は、“狂詩曲”の題にふさわしく気分の変化が激しいが、構成上は明快な変奏曲形式(序奏、主題と24の変奏、およびコーダ)をとる。主題は、多くの作曲家がやはり変奏曲の主題として用いたニコロ・パガニーニ(1782~1840)の《無伴奏ヴァイオリンのための24のカプリス》第24番の有名な主題である。

曲はまずアレグロ・ヴィヴァーチェ、主題の動機を用いたきわめて短い序奏に始まる。その後で主題が提示されるのかと思いきや、この作品はまず管弦楽のみで切れ切りに和音を奏する第1変奏があって、それから初めて主題提示(主題を奏するのは第1&第2ヴァイオリン。ピアノは先の第1変奏を繰り返している)となる。保守的な中でも新しいことを試みるラフマニノフの工夫は注目すべきだろう。以後第6変奏までは(多少テンポの変化はあるものの)急速で軽快な動きを中心に変

奏が繰り返される。

その流れが変わるのがテンポの緩む第7変奏で、ここではピアノがグレゴリオ聖歌の《怒りの日》の旋律を奏でる。多くの作曲家が死を暗示する主題として用いたこの聖歌旋律を、ラフマニノフも幾つかの作品に引用しているが、この《狂詩曲》では変奏曲の中に副次的主題として導入している。この点にも彼の創意工夫が窺えよう。

第8変奏で再び曲頭のテンポに戻って力強く進行し、第10変奏ではまたも《怒りの日》が現れて悪魔的な盛り上がりを作る。

モデラートに転じる第11変奏は一転、幻想的、瞑想的となって、ピアノのカデンツァに発展する。メヌエットのテンポによる第12変奏、アレグロの勇壮な第13、14変奏、ピアノの敏捷な動きによる第15変奏（スケルツァンド）、アレグレットの陰鬱さを秘めた第16、17変奏を経て、ラフマニノフ節を効かせた夜想曲風の有名な第18変奏（アンダンテ・カンタービレ）が甘美なひと時を作り出す。

第19変奏で曲頭のテンポに回帰、以後はピアノの力強い技巧と、管弦楽との丁々発止のやり取りのうちに緊迫感を加え、コーダでは《怒りの日》も再度出現して圧倒的な頂点を作り出す。

（寺西基之）

作曲年代：1934年

初 演：1934年11月7日 ポルティモア 作曲者独奏  
レオポルド・ストコフスキー指揮 フィラデルフィア管弦楽団

楽器編成：ピッコロ、フルート2、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、小太鼓、トライアングル、シンバル、大太鼓、グロッケンシュピール、ハープ、弦楽5部、独奏ピアノ

## ベートーヴェン：

### 交響曲第3番 変ホ長調 op.55《英雄》

初期には18世紀的な古典様式から出発したルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン（1770～1827）だが、革命期の新しい時代精神に敏感であった彼は、早くから時代にふさわしい新たな様式的な開拓を行っていった。すでに古典様式を超えるダイナミズムを持つ交響曲第2番（1802年）などで中期へ向けての方向を指し示していた彼は、中期の一連の作品群で大規模な形式と大胆な書法によるドラマティックな作風を様々に打ち出していく。

1803年に書かれた交響曲第3番はそうした中期の幕開けとなった作品のひとつで、交響曲史上空前といえる大規模な形式と起伏に満ちたドラマ性を持った、革命的な作品である。ベートーヴェンは自由と人間性の解放を求める当時の時代思想に深く共鳴しており、中期の拡大された様式の追求もそうした姿勢と深く関わっているが、とりわけこの作品は、彼が新しい時代の英雄と見なしていた尊敬するナポレオン・ボナパルト（1769～1821）を念頭において書かれたことが大規模で劇的な作風に結び付いたと考えられる。

よく知られたエピソードとして、その後、ナポレオンの皇帝即位の報を聞いたベートーヴェンが、「あの男も結局は俗人だったのか」と激怒し、「ボナパルトと題する」と書かれてあった浄書譜の表紙を破り捨てたという話が弟子のフェルディナント・リース（1784～1838）によって伝えられている。ただ実際は「ボナパルトと題する」という言葉こそ削り取られているものの表紙自体は残されているので、この話は正確ではない。また即位を知った後にもベートーヴェンは出版社宛ての手紙で「交響曲の表題はボナパルトで」と述べていて、ボナパルトの題に依然こだわっていたことが窺える。

しかし最終的に表題にはボナパルトという語が記されることはなく、「英雄的交響曲—ひとりの偉大な人物の思い出のために」とされたのだった。

**第1楽章 アレグロ・コン・ブリオ** 変ホ長調。拡大されたソナタ形式が劇的な起伏と綿密な展開に結びついたスケール感溢れる楽章。コーダも第2展開部というべき充実したものとなっている。

**第2楽章 葬送行進曲／アダージョ・アッサイ** ハ短調。荘重な緩徐楽章で、悲劇的な葬送主題、明るい副主題、葬送主題のフーガ風な展開など、変化に満ちて発展していく。

**第3楽章 スケルツォ／アレグロ・ヴィヴァーチェ** 変ホ長調。急速なスタッカート動きを中心とする力強いスケルツォ。トリオでのホルンの活躍も聴きものである。

**第4楽章 フィナーレ／アレグロ・モルト** 変ホ長調。自由な変奏形式によるフィナーレで、短い序奏の後にピッツィカートで示されるバス主題と、その後に現れる旋律主題をもとに、巧緻に構成されている。なおこの主題をベートーヴェンはすでにバレエ《プロメテウスの創造物》やピアノのための変奏曲などで使用していた。

（寺西基之）

作曲年代：1802～04年

初演：私的初演／1804年4～5月 ウィーン ロブコヴィッツ侯爵邸  
公開初演／1805年4月7日 ウィーン アン・デア・ウィーン劇場

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン3、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部



4/29

# KOIZUMI Kazuhiro

Honorary Conductor for Life

終身名誉指揮者 小泉和裕

東京藝術大学を経てベルリン芸術大学に学ぶ。1973年カラヤン国際指揮者コンクール第1位。ベルリン・フィル、ウィーン・フィル、シカゴ響などに客演。新日本フィル音楽監督、ウィニペグ響音楽監督、都響指揮者／首席指揮者／首席客演指揮者／レジデント・コンダクター、九響首席指揮者、日本センチュリー響首席客演指揮者／首席指揮者／音楽監督などを歴任。現在、都響終身名誉指揮者、九響音楽監督、名古屋フィル音楽監督、仙台フィル首席客演指揮者、神奈川フィル特別客演指揮者を務めている。

Kazuhiro Koizumi studied at Tokyo University of the Arts and at Universität der Künste Berlin. After winning the 1st prize at Karajan International Conducting Competition in 1973, he has appeared with Berliner Philharmoniker, Wiener Philharmoniker, among others. Currently, he serves as Honorary Conductor for Life of TMSO, Music Director of Kyushu Symphony, Music Director of Nagoya Philharmonic, Principal Guest Conductor of Sendai Philharmonic, and Special Guest Conductor of Kanagawa Philharmonic.

# プロムナードコンサートNo.372

Promenade Concert No.372

東京オペラシティ コンサートホール

2017年4月29日(土・祝) 14:00開演

Sat. 29 April 2017, 14:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

指揮 ● 小泉和裕 KOIZUMI Kazuhiro, Conductor

ピアノ ● キム・ソヌク Sunwook KIM, Piano

コンサートマスター ● 矢部達哉 YABE Tatsuya, Concertmaster

ベートーヴェン：

バレエ音楽《プロメテウスの創造物》序曲 op.43 (5分)

Beethoven: Overture to „Die Geschöpfe des Prometheus“, op.43

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 op.37 (24分)

Beethoven: Piano Concerto No.3 in C minor, op.37

I Allegro con brio

II Largo

III Rondo. Allegro

休憩 / Intermission (20 分)

メンデルスゾーン：交響曲第3番 イ短調 op.56

《スコットランド》(36分)

Mendelssohn: Symphony No.3 in A minor, op.56, "Scottish"

I Andante con moto - Allegro un poco agitato

II Vivace non troppo

III Adagio

IV Allegro vivacissimo - Allegro maestoso assai

主催：公益財団法人東京都交響楽団

後援：東京都、東京都教育委員会



演奏時間と休憩時間は予定の時間です。

ヤングシート対象公演（青少年を年間500名ご招待）協賛企業・団体はP.51、募集はP.54をご覧ください。



お願い 演奏中は携帯電話、アラーム付き時計、補聴器などの音が鳴らないようにご注意ください。  
写真撮影、録音、録画はお断りいたします。音楽の余韻を楽しむ拍手をお願いいたします。



Piano

# Sunwook KIM

ピアノ キム・ソヌク



1988年ソウル生まれ。2006年、リーズ国際ピアノ・コンクール40年の歴史上最年少、かつアジア人として初めて優勝。これまでにロンドン響、ドイツ・カンマーフィルハーモニー・ブレーメン、フランス放送フィルなどと、アシュケナージ、ハーディング、P. ヤルヴィ、チョン・ミュンフンらの指揮者と共演。リサイタルでもロンドン、パリ、ベルリン、東京へデビュー。CDはベートーヴェンのソナタ集や《皇帝》などをリリースしている。

Sunwook Kim won the Leeds International Piano Competition in 2006, becoming the competition's youngest winner in 40 years, as well as its first Asian winner. He has performed with orchestras including London Symphony, Deutsche Kammerphilharmonie Bremen and Orchestre Philharmonique de Radio France under the batons of Ashkenazy, Harding, P. Järvi, and Myung-Whun Chung, among others. Kim made his recital debut in London, Paris, Berlin, and Tokyo.



## ベートーヴェン： バレエ音楽《プロメテウスの創造物》序曲 op.43

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン (1770~1827) の初期の終わり頃の所産である《プロメテウスの創造物》は、当時ウィーンで活動していたイタリア出身の舞踏家・振付家サルヴァトーレ・ヴィガノ (1769~1821) の構想によるバレエのために書かれた音楽で、ギリシャ神話のプロメテウスを主人公としたものである。

ヴィガノ自身が作成した台本は消失しているために物語の詳細は不明だが、残された資料から概略は次のようなものだったと思われる。プロメテウスは泥と水から人間の男女の像を作り、天上から盗み出した火で像に生命を吹き込む。しかしこの人間たちには知性や理性がなかったため、プロメテウスは彼らをパルナッソス山に連れて行き、アポロをはじめとする神々のもとで教育を受けさせ、彼らは真の人間となる。

こうした物語の背景には、人間の理性や知性を重んじる当時の啓蒙主義思想や、フランス革命の寓意があることは明らかで、それはベートーヴェン自身の思想に通じるものであった。作曲は1800年から翌年初めにかけてなされ、1801年3月にウィーンのホーフブルク劇場で行われた初演は好評を博している。

全体の構成は序曲、導入曲、16のバレエ曲の計18曲。1曲ごとに特徴的な性格付けがなされ、特に序曲はしばしば単独で演奏される名曲である。アダージョの序奏で始まるが、その冒頭の大胆な和声の扱いはこのバレエのすぐ前に書かれた交響曲第1番の冒頭に通じる点がある。続くアレグロ・モルト・コン・ブリオによるソナタ形式の主部は無窮動風な動きによる第1主題と軽やかな第2主題を持ち、やはり交響曲第1番を思わせる明るい性格のもの。若きベートーヴェンの生気がほとばしり出たような魅力溢れる序曲である。

(寺西基之)

作曲年代：1800~01年

初 演：1801年3月28日 ウィーン

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部

## ベートーヴェン： ピアノ協奏曲第3番 ハ短調 op.37

ベートーヴェンは生涯で番号付きのピアノ協奏曲を5つ残しているが、この作品

のみ短調で書かれており、異例の位置を占めている。

ここで、ハ短調という調性の意味について考えておこう。少なくとも19世紀前半までのヨーロッパの美学においては、それぞれの調性は各々異なる意味合いを具えていると考えられていた。中でもハ短調は、悲劇性や闘争を象徴する調性だったのである。

じっさい、当ピアノ協奏曲を作った当時のベートーヴェンは、終生抱え込むこととなる耳の病と闘っている最中だった。また遠くフランスでは、ナポレオン・ボナパルト（1769～1821）が第一統領に就任して権力を掌握。ベートーヴェンも熱狂したフランス革命の思想をヨーロッパ中に広めることを錦の御旗に、各地で快進撃を繰り広げていた。このような公私にわたる“闘いの時代”に、それを端的に象徴する調性をベートーヴェンは最新のピアノ協奏曲に持ち込んだ。そしてこれは、非常に思い切った決断ではなかったか？

ピアノ協奏曲は元来、ピアニストがオーケストラをバックに自らの腕前を披露するためのジャンルだった。というわけで古典派の協奏曲では、たとえば第1楽章においてまずはオーケストラが前座のようにメロディを奏でた後、独奏ピアノが花道を通るがごとくやおら登場するといった形式も、ピアニストこそが主役であるという考え方を如実に反映したものに他ならない。そしてこの形式はあまりにも説得力があったため、ベートーヴェンの当協奏曲ですら、それに則って書かれているほどである。

ただし従来型のピアノ協奏曲においては、ピアニストの腕前を華々しく強調するという目的のゆえ、長調を基本とする煌びやかで派手やかな曲想がよしとされていた。そうした風潮の中であって、ベートーヴェンはあえて短調、それもハ短調という調性を導入した。ちなみに協奏曲に短調を導入した有名な先例は、彼の先輩にあたるモーツァルト（1756～91）だが、いわばその路線を継承・拡大したのがピアノ協奏曲第3番だったといえよう（当協奏曲でこのジャンルに大きな価値転換をもたらしたベートーヴェンは、続くピアノ協奏曲第4番・第5番《皇帝》においては、曲の冒頭からピアノを登場させたり、オーケストラにピアノと同等の主張を行わせたりといった具合に、さらなる斬新な世界を築き上げていった）。

**第1楽章**はアレグロ・コン・ブリオの表記の下、2分の2拍子、つまり闘争性を帯びた行進曲を想起させる拍子に乗って、ソナタ形式に基づくハ短調の激しい音楽が奏でられる。**第2楽章**は対照的にラルゴ（ゆったりと）と指定され、8分の3拍子に基づく瞑想と慰めに満ちたホ長調の曲想が複合三部形式で交差する。**第3楽章**は再び2拍子（ただし4分の2拍子）に戻り、アレグロ指定の下、 Rond 形式で短調や長調の部分が激しく切り結んだ後、最後は急速なテンポで輝かしいハ長調が響きわたる。

このように全体としてはハ短調を基本としているものの、そこに長調の楽想が時には勇壮に、時には優しく絡むことで、ベートーヴェンが闘いの中で掴み取ろうとしていた希望や、悩み多い日々の中で夢見た希望が明滅する。そうした意味で、当曲は古典派の協奏曲の様式にぎりぎりどまりとどまる一方、作曲家の情熱や感情が至るところにほとばしる作品として、19世紀のロマン派のピアノ協奏曲への道を切り開いた存在といえるだろう。

(小宮正安)

作曲年代：1796～1803年

初 演：1803年4月5日 ウィーン アン・デア・ウィーン劇場 作曲者独奏

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部、独奏ピアノ

## メンデルスゾーン：

### 交響曲第3番 イ短調 op.56《スコットランド》

オーケストラ用に5曲書かれたメンデルスゾーン(1809～47)の交響曲のナンバリングが出版順に並んでいることはご存じの方も多いだろう。作曲順に並べ替えると、

第1番	1824年
第5番《宗教改革》	1830年
第4番《イタリア》	1833年
第2番《賛歌》	1840年
第3番《スコットランド》	1842年

となり、この交響曲第3番がメンデルスゾーンの実質的な「最後の交響曲」に相当することがわかる。

しかも近年の研究によれば、メンデルスゾーン自身は管弦楽編成の交響曲を、12曲ある「弦楽のための交響曲」からの続編として考えていたことや、現在「交響曲第2番」とされている《賛歌》は実のところ宗教曲の性格が強いカンタータ的な作品として発表されていたことなどが指摘されており、将来的には(シューベルトの《未完成》や《ザ・グレート》の番号が変わったように)「メンデルスゾーンの交響曲」に関するナンバリングが改められる可能性も決して少なくはないようだ。早熟の天才であったメンデルスゾーンが30代後半という若さで早世しなければ、あるいは自分の納得のいく作品を系統立てて整理する余裕にも恵まれたのかかもしれない。

この交響曲第3番のサブタイトルとして定着している《スコットランド》という名

称も、作曲者の意図を反映したものかどうかについては議論がある。メンデルスゾーンは1829年の夏、スコットランドの古都エディンバラに滞在してこの交響曲の着想を得た。中世の趣きを色濃く残す古城などが多い同地だけに自然や歴史を好む彼のインスピレーションを刺激する事物には事欠かなかったと思われ、この頃には書簡などにも「私のスコットランド交響曲」といった言い回しが登場する。

ところが次第に作曲の筆は滞り、1835年から始めたライプツィヒでの指揮活動の多忙さも重なったことで作曲は長いあいだ目立った進展をみせなかった。やがてプロイセン王フリードリヒ・ヴィルヘルム4世から招かれてベルリンの宮廷礼拝堂楽長に就いたメンデルスゾーンは、一念発起して1841～42年にかけてこの作品と集中的に取り組み、ようやく完成・初演にこぎつけている。

彼の自筆譜や出版譜にはスコットランドやそれを連想させる具体的な書き込みはなく〔あえて言えば初版譜にある第4楽章冒頭の「guerriero (闘争的に)」という発想記号が中世の騎士たちの闘いを暗示しているとも解釈できるが〕、着想こそ彼の地の風物から得たものの、最終的にはそうした標題性をあえて避けるように交響曲としての純化が図られていったと考えるのが妥当だろう。

一方で、文学的な興味から“着想の源としてのスコットランド”に想いを馳せた後世の人々がこの副題を用いたのも自然な流れであり、同様の経緯を持つ交響曲第4番《イタリア》(こちらはサルタレッロのリズムなどイタリアを強く感じさせる要素にも事欠かないが)と並んで、興趣のひとつとして受容することは許されるのではないか。

曲は4楽章制をとるが、各楽章はすべてアタッカで(続けて)演奏される。これはメンデルスゾーン自身の指示である。

第1楽章(アンダンテ・コン・モート～アレグロ・ウン・ポーコ・アジタート)は序奏を伴うソナタ形式。第2楽章(ヴィヴァーチェ・ノン・トロツポ)は楽しい雰囲気なたたえたスケルツォ。緩徐楽章にあたる第3楽章(アダージョ)では終始ひそやかなメランコリーが漂う。第4楽章(アレグロ・ヴィヴァチッシモ～アレグロ・マエストーソ・アッサイ)は激しくリズムカルなフィナーレ。コーダで劇的に楽想が変わり、雲間から光明が射すような表現はとりわけ印象的である。

(吉村 溪)

作曲年代：1829～42年(1843年まで断続的に改訂)

初 演：1842年 ライプツィヒ

作曲者指揮 ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管弦楽団

楽器編成：フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部